

(専門科目 教育実践講究)

科目名	教育実践講究 英語名：Special Seminar on Theory	必修/選択	必修
		単位数	4単位
		担当教員	専任教員
【授業概要】 本科目は博士後期課程（以下「博士課程」）の導入科目として、①博士課程の学生としての心構え、②研究に臨むうえでの基本的なスキル、③実践を研究し「実践と理論を往還する」ための発想について学ぶ。 特に「研究に臨むうえでの基本的なスキル」面では、海外論文を含めた先行研究の検討やレビュー、博士論文出の問いの立て方や博士論文の構造、主要な研究方法を、「実践と理論を往還する」観点ではデータとの向き合い方や「実践と理論の往還」による研究についての検討を行っていく。これらの通年での取り組みから、博士論文を書くための研究の基礎を身につける。			
【キーワード】 問いの立て方、先行研究レビュー、研究倫理、研究方法、実践と理論の往還			
【授業の到達目標】 1. 先行研究レビューについて理解し、自身の博士論文の基礎となる研究状況を批判的に検討したうえで、把握できる。 2. 主要な研究方法の概要について理解し、自身が行う手法の特色、強み、限界を理解できる。 3. 「実践と理論の往還」の発想を理解し、自身の博士論文がどのように「実践と理論の往還」の理念を体現できそうかについてイメージを持つことができる。			
【教育の方法】 スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】			
【授業計画】 4単位 ※標準学修時間 45時間（予習・復習を含み 135時間）1回の目安：3時間			
回	内 容		
1	【通信教育】研究倫理について学ぶ		
2	【通信教育】博士号を取るということ（テキスト学修）		
3	【SC】研究とは①－研究を行うということ、先行研究の活用－		
4	【SC】研究とは②－問いの立て方・解き方、博士論文の構造－		
5	【通信教育】研究方法①－論文の書き方（テキスト学修）－		
6	【通信教育】研究方法②－量的研究について（テキスト学修）－		
7	【通信教育】研究方法③－質的研究について（テキスト学修）－		
8	【SC】課題発表①－先行研究レビューの結果について－／論文の書き方		
9	【SC】研究方法④－量的研究・質的研究・歴史研究－		
10	【通信教育】研究実践の検討（学会発表・論文執筆のプランニング）		
11	【SC】研究における視野の獲得 －マイクロ・メゾ・マクロの視点、データとの向き合い方－		
12	【SC】課題発表②－学会発表・論文発表の検討－／学会発表・論文投稿の留意点		
13	【通信教育】実践と理論の往還を考える①（資料による学修）		
14	【SC】課題発表③－1年の実践をもとにした次年度以降の計画－		
15	【SC】実践と理論の往還を考える②		
試験			

【履修にあたっての準備・履修上の注意点】

前の回のスクーリング（初回は履修登録時）までに指定されるテキストでの予習やスクーリング時に出される課題を進めながら、学修していく。スクーリングは課題やそこまでのテキスト学修を行っていることが前提であるため、事前にあるテキスト学修等の回は、スクーリング前に終らせておくこと。

【スクーリングを含む各回での学修内容】

スクーリング（以下「SC」）は4回に分けて実施し、1回は2コマ行い、合計8コマ24時間をめどに行う。本科目に限り、1コマは3時間で行うので、各SCは1日2コマで6時間となる。1回目のSCは5月ごろ、2回目のSCは夏、3回目のSCは秋、4回目のSCは冬に実施する。

(1) 第1・2回（通信教育）では、博士課程の学生としての心構えを学ぶ。第1回では学術振興会のeラーニング教材を用いて、研究倫理について学修する。第2回では指定されたテキスト（テキスト①）を講読し、博士課程での学修について考えてみる。

【提出物：eラーニング修了証】（提出方法：初回のSCまでにクラスルームにて提出）

(2) 第3・4回（SC1回目）では、研究の基礎を学ぶ。ここでは、第2回のテキストも参考にしながら、①博士課程で論文を書いていく実践を検討するとともに、②先行研究の検討の仕方、海外論文の検索、専門的文献と一般的文献の違いを学び、③問いの立て方・解き方を考え、④あわせて将来書くことになる博士論文の構造を学ぶことで、3年間の過ごし方について検討をできるようになることを目指す。その成果を高めるため、事後課題（下記参照）を課す。

【課題①：指導教員のアドバイスを受けながら、先行研究を調べ、プレゼン資料としてまとめておく】（SC2回目（第8回の課題発表①として発表する）

(3) 第5・6・7回（通信教育）では、研究方法の基礎を学ぶ。指定されたテキスト（テキスト②・③）を講読して学ぶ。量的・質的研究方法の書籍については不明点を明確にし、まとめておく。

【課題②：第6・7回に関する書籍から気づいたこと・不明点】

（提出方法：SC2回目の1週間前までにクラスルームに提出する）

(4) 第8・9回（SC2回目）・10回（通信教育）は、第8・9回のSCと、第10回の通信教育からなる。SCでは、第一に、前回SCを踏まえて検討した自身の先行研究に関して発表を行う。相互に発表を行うことで、先行研究のまとめ方、検討の仕方について気づきを得るとともに、将来にレビュー論文を投稿できることを目指す。第二に、研究方法について学ぶ。すでにテキスト学修した量的研究・質的研究については、理解が不十分な点を解決するとともに、さらに自身のテーマに沿って活用するための方策を学ぶ。そのほか、歴史研究・比較研究など、多様な視点を学修していく。学修の成果は、第10回の研究実践の検討に生かし、発表した先行研究の状況を踏まえて、テーマを再検証し、どのような学会で発表や論文投稿をしていくかといった具体的なプランニングを指導教員と行っていく。以上が、秋の研究発表会までに行うべき内容である。

【課題③：指導教員のアドバイスを受けながら、学会発表・論文発表について検討し、プレゼン資料としてまとめる】（SC3回目の課題発表②として発表する）

(5) 第11・12回（SC3回目）では、第一に、実際に研究していく上での向き合い方について考える。具体的には、ディプロマ・ポリシーにもある「個人から社会システムまでを含むような包括的な視点」にかかわって、自身が行っている研究はどのようなサイズのものであるのか、関連してどういった視点があるのかを学び、あわせて、データとの距離の取り方や向き合い方を考える。特に、実践現場で関わるケースも多い学生にとって、自身の立ち位置に自覚的になることの重要性を考える。第二には、2回目のSCでのプランニングを踏まえての、学会発表や論文投稿の検討の状況について、相互に意見交換をする。その際に、学会発表や論文投稿での留意点について、教員から学んでいく。さらに、最終回のSCに向けて、1年の学修成果のまとめを作成し、次年度以降の計画を練り上げる。これをレポートして提出する。

【課題④：1年の学修成果のまとめと次年度以降の計画（プレゼン資料）を作成する】

（SC4回目の課題発表③として発表する）

※博士研究指導Ⅰ提出物の原案として作成すること

(6) 第13回(通信教育)・14・15回(SC4回目)は、テキスト学修と、それを踏まえたSCから成る。テキスト学修では指摘されたテキストとして資料(クラスルームにアップ予定)を講読し、「実践と理論の往還」とはどのような概念かを考える。SCでは、第一に、1年間の学びの成果を発表し、今後の計画や課題について共有する。第二に、科目の総括として、テキスト学修の成果も踏まえつつ、ディプロマ・ポリシーにある「教育に関する実践と理論を往還して自律的に研究を遂行する」とはどのようなことなのかを教員・学生間で検討を行う。

以上を踏まえて、以下の科目修得試験を提出する。科目修得試験は最終回SCで提示する。

【評価方法】

スクーリングでのディスカッション・発表(30%)、課題(合計40%)、科目修得試験(30%)で評価する。成績評価の際には、スクーリングでの学修や学修過程での姿勢を含めて総合的に評価する。

【テキスト】

<テキスト① 博士号をとるとのこと>

- ・E・M・フィリップス, D・S・ピュー(角谷快彦訳)(2025)

『博士号の取り方[第7版]学生と指導教員のための実践ハンドブック』名古屋大学出版会

<テキスト② 研究方法の基礎(論文の書き方)>

- ・小熊英二(2022)『基礎からわかる論文の書き方』講談社現代新書

<テキスト③ 研究方法の基礎(質的研究, 量的研究, 歴史研究)> ※3冊とも講読すること

- ・中寫洋(2015)『初学者のための質的研究26の教え』医学書院
- ・下山晴彦・能智正博編(2008)『心理学の実践的研究法を学ぶ』臨床心理学研究法1 新曜社
- ・岩下誠, 三時眞貴子, 倉石一郎, 姉川雄大(2020)『問いからはじめる教育史』有斐閣ストゥディア(序章「教育史って何の役に立つの?」, 終章「教育史って何の役に立つの?再び」)

<テキスト④ 「実践と理論の往還」>

- ・別途、クラスルームにアップされた資料を講読する。

【参考図書】

<参考図書① 博士号をとるとのこと関連>

- ・石黒圭(2021)『文系研究者になる』研究社
- ・近藤克則(2018)『研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」』医学書院

<参考図書② 研究方法の基礎(論文の書き方)関連>

- ・酒井聡樹(2015)『これから論文を書く若者のために 究極の大改訂版』

<参考図書③ 研究方法関連>

1) 質的研究

- ・太田裕子(2019)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ—研究計画から論文作成まで』東京図書
- ・大谷尚(2019)『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで—』名古屋大学出版会
- ・ジョン・W・クレスウェル, ジョアンナ・クレスウェル・バイアス(廣瀬眞理子訳)(2022)『質的研究をはじめるための30の基礎スキル—おさえておきたい実践の手引き』新曜社
- ・やまだようこ(2021)『ナラティブ研究 語りの共同生成』新曜社
- ・APA論文作成マニュアル 第3版(2023)アメリカ心理学会(APA)医学書院

2) 量的研究

- ・山田一成編著(2023)『ウェブ調査の基礎—実例で考える設計と管理』誠信書房
- ・川端一光, 荘島宏二郎(2014)『心理学のための統計学入門』誠信書房(シリーズ心理学のための統計学第1巻)

3) 歴史研究

- ・東京大学教養学部歴史学部会編(2020)『歴史学の思考法』岩波書店. 第2章「過去の痕跡をどうとらえるのか—歴史学と史料」(渡辺美季)

4) 領域別(健康科学・看護学)

- ・Hosoda, M., Qualitative Data Analysis and Health Research, Researching Health: Qualitative, Quantitative And Mixed Methods 3rd edition, Sage, London, 2019, pp.203-224

【教員メッセージ】

学生の皆さん、1年間学ぶ中で、博士号取得の基礎となる能力を身につけていきましょう。

【備考】

なし